

お別れ会でこころはひとつ
～ 私もこんな風に見送ってほしい ～

キーワード

生きること
それぞれの区切り
つなぎ、つむぐ

キーワードについては
必ず3つ記入の事！！

【施設名】：介護老人福祉施設白ゆりあいの里

研究者 (取組に関わった方 のお名前5名まで)	氏名	職種	備考
	① 前田 彩華	生活サポーター (介護職員)	
	② 大平 真由美	生活支援課課長	
	③ 稲谷 丈広	生活相談係長	
	④		
	⑤		

施設の概要

※ここに記載した内容のうち、発表内容に直接重要な関係を持たない事項については、本資料をもって発表の際の説明から省略してください。

設置主体	社会福祉法人悠生会		経営主体	社会福祉法人悠生会	
開設年月日	平成24年4月1日		所在市町村	札幌市	
市町村人口	1,958,538	人	65歳以上人口 (高齢化率)	391,796	人 (高齢化率 20.5%)
利用者定員数	80	人	利用者平均年齢	86.3	歳
職員数	67	人	職員数内訳	介護職 47名 看護職 9名	
併設施設・事業	ショートステイ白ゆりあいの里・介護相談白ゆり				
施設のサービスの概要	1. 入居者様の生きる力を支え合う (口から食べる事・理学療法士指導のもと個別機能訓練の実施) 2. 入居者様の最期まで生き生きとを支え合う (亡くなってからも続く関係性作り・職員間の死生観への教育) 3. 活力ある街づくりの一翼を担う (世代や職種を超えての交流・地域貢献への意識改革)				

発表の概要

<p>①取り組んだ課題</p> <p>最期まで生き生きすることを目標に、ご家族と支え合いながら看取り援助を行ってきました。白ゆりあいの里では、死は特別なものではなく誰もが必ず訪れる自然なものとして受け止められるようになりました。それは入居者様にとっても同様であると考え、お亡くなりになった後には、ユニットでお別れ会を開いています。自分たちの手でお別れの言葉を伝え、入居者様からも言葉をかけていただき、最後にはご家族様からも言葉を頂くことで、それぞれの区切りとなり命のバトンがつながっていきます。その取組み、職員や入居者様の様子、ご家族様との</p> <p>②具体的な取組み</p> <p>平成26年度から19名の方の看取り援助を行ってきました。開設から2年間は医師の体制が確立されていませんでしたが、日々の活動の中で協力していただける医師と出会い、職員の覚悟も決まってきました。また経験を積み毎に死が怖いものではなく、当たり前的事として受け止められるようになりました。最期まで悔いなく生き生きの大切さ、そのお手伝いを可能な限り支援すること、亡くなったら関係が終わるのではなく、その後もつなげていくにはどうしたらよいか。その思いを形として表現する為に、お別れ会を行ってきました。死を隠すのではなく、入居者様、ご家族様、職員皆が思いや感謝を伝えます。入居者様の精神的負担が重くならないかと心配する声もありましたが、反対に「私もこんな風に見送ってほしい」「こうやって覚えていてくれて幸せだ」という言葉が聞かれ安心感につながっています。お別れ会をすることで関係性を維持しながら、それぞれの区切りにもなっていきます。今後も白ゆりあいの里としての、心のこもった看取り援助を深めていきたいと考えています。</p>	<p>③活動の成果と評価</p> <ul style="list-style-type: none"> お別れ会をすることで、すべての入居者様に死を隠さないで済み、一緒に思い出話を語る事ができます。 セレモニーとして行うことで、感謝の言葉を伝えやすく、ご家族との関係性もより深まり、繋がっていきます。 ご家族様からも「感動の一幕で終われることができた」と感謝の言葉が聞かれています。 自分の手で最後までおくりたいという職員の自覚と責任感がもてるようになりました。入院して食べられなくなって、【胃瘻増設】【中心静脈栄養】の選択だけでなく、【何もしないで白ゆりあいの里に戻って生活を続ける】という選択肢を病院側からも提示してもらえるようになりました。 <p>④今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> 入居者様、ご家族様のニーズに合わせたお見送り 経験のない職員への指導 コミュニケーション技術の向上 (ご家族との関係作り) 多職種連携 <p>⑤参考資料など</p>
---	---